

- の物見台, 武威を示す軍旗を主さどる]—帆 303G (藪).
- 282 器府³² 楽器をおさめる倉庫. [音楽を主さどる]—ケンタウルス 43 G (藪).
- 283 土司空⁴ 水利土木を職掌とする官. [No. 187] [国境地方を主さどる]—海蛇 β (藪).
- (補注) 蘇頌星図 (写真版) は, 藪内清氏によれば, 北宋の元豊年間 (1078~1085) の観測にもとづいて描かれたものである.

参 照 文 献

- 1) 史記天官書 漢書天文志 晋書天文志 隋書天文志 宋史天文志 歩天歌 唐開元占経 通占大象歴星経 蘇頌星図 (新儀象法要所収) 淳祐(蘇州)天文図

- 2) 吉田光邦訳: 史記天官書 (中国古典文学全集 第4巻 史記 上) 1958.
Ho Peng-Yoke (何平郁): The Astronomical Chapters of The Chin Shu (晋書天文志), 1966.
Needham (曹漢訳): 中国之科学与文明 第5册 (天文学) 1975.
藪内清・山田慶児・坂出祥伸訳: 晋書天文志(世界の名著 続第1巻—中国の科学— 1975)
- 3) 書経 詩経 周礼 礼記 左伝 爾雅 淮南子 楚辞 吕氏春秋 国語 文選 玉海 太平御覧 文献通考 歴代職官表
- 4) 清永嘉一: 史記天官書恒星考 (東方学報・京都第14册第3分) 1944.
藪内 清: 中国・朝鮮・日本・印度の星座 (新天文学講座 I.) 1957.
藪内 清: 中国における星座の成立過程 (竜谷大学論集 No. 400・401 合併号, 1973.)

雑 報 [II]

1975 年中の日本人による新天体の発見

新天体, 特に彗星・新星の発見では日本人の活躍が大きい. 特に 1975 年は, 新彗星 5 個, 新星 2 個であって, 1970 年の新彗星 4 個, 新星 2 個の記録を更新した.

また 1 人の観測者が 1 夜の内に 2 個の新彗星を発見したのも最初の記録であろう. 1975 年内に日本人によって発見された新天体は次の通り. (時刻は U.T.)

West・Kohoutek・Ikemura 彗星 (1975 b)

1975 年 3 月 1 日 12 時 30.7 分 池村俊彦氏

Kobayashi・Berger・Milon 彗星 (1975 h)

1975 年 7 月 2 日 17 時 01 分 小林 徹氏

1975 年射手座新星

1975 年 7 月 13 日 12 時 20 分 桑野善之氏

1975 年白鳥座新星

1975 年 8 月 29 日 11 時 30 分 長田健太郎氏他 3 名と

1 グループ

Mori・Sato・Fujikawa 彗星 (1975 j)

1976 年 2 月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	0,	0	6	0,	0	11	0,	0	16	—,	—	21	1,	4	26	0,	0
2	0,	0	7	0,	0	12	0,	0	17	1,	3	22	—,	—	27	1,	1
3	0,	0	8	0,	0	13	1,	11	18	—,	—	23	—,	—	28	—,	—
4	0,	0	9	0,	0	14	1,	17	19	—,	—	24	0,	0	29	—,	—
5	—,	—	10	1,	3	15	1,	10	20	—,	—	25	0,	0	*	*	*

(相対数月平均値: 4.3)

昭和 51 年 4 月 20 日	発 行 人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印 刷 所	〒112 東京都文京区水道 2-7-5	啓文堂 松本印刷
定価 300 円	発 行 所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話武蔵野 31 局 (0422-31) 1359	振替口座東京 6-1 3 5 9 5

1975 年 10 月 5 日 17 時 50 分 森 敬明氏他 2 名

Suzuki・Saigusa・Mori 彗星 (1975 k)

1975 年 10 月 5 日 18 時 40 分 鈴木繁道氏 他 4 名

Sato 彗星 (1975 q)

1975 年 12 月 5 日 18 時 15 分 佐藤安男氏

(香西洋樹)

◇ 5 月 の 天 文 暦 ◇

日 時	記 事
5 18	立 夏 (太陽黄経 45°)
7 14	上 弦
10 1	水 星 留
13 2	月 最 近
14 5	望
20 21	水 星 内 合
21 6	下 弦
7	小 満 (太陽黄経 60°)
25 9	月 最 遠
29 11	朔

5月の星座

野尻抱影

1. おおぐま (URSA MAJOR)

子午線経過5月3日，高度(北)67°。アルクトス(大ぐま)となった神話の美女カリストは逆づりになっている。

いまごろの北斗七星は，西のβ，αがふさ飾りを垂れた船首，η(破軍星)を船尾とする千石船の形に見立てられる。それで諸地方でフナボシと名づけている。沖縄には雄渾なフナブシ・ユンタ(舟星の歌)がある。しかし，この舟星はむしろマライでいうピンタン・ジョング(ジャンク)の星，ジャワのサラット・ジョング(同上)に結びつくだろう。これがのびると，天草版切支丹辞典にあるポルトガル名Barca do norte(北の帆船)となる。

海の縁では北斗七星をカジの形とみる地方が多い。能登の漁夫は「北の大舵・南の小舵」と唄のようにいう。南の小舵は，いて座の南斗六星である。

大ぐまの3本の足さきには，2つずつ3対の星が位置する。いまごろの北斗の上方から右方へかけて飛び飛びに，しかも殆んど等間隔にあるのを肉眼で確かめるのは楽しい。沙漠のアラビアの土人は，この3対の星をカモンカがビョンビョン跳んだ足跡とみて，「一と跳び，二た跳び，三跳び」とよんでいる。私はプラネタリウムで「ホップ，ステップ，ジャンプ」と火の矢で指して拍手されたことがある。この3対の漢名は三台星で，左から上台・中台・下台という。人位の三公に対する高貴な星官で大阪四天王寺の国宝七星剣には金で象眼してある。

北斗七星で最も目を引くのはζ(ミザール)の肉眼の重星アルコルで和名ソエボンである。視間隔11分半，実際には天文単位の約1万6千倍という。小望遠鏡の持主は，ζにエメラルドのように美しい伴星を見て讚嘆する。私は志賀直哉さんと初対面のとき，これをお目にかけて喜ばれた秋の夜を忘れない。

アルコルは「騎手」でζを馬とみた名だが，一名のサイダク(目だめし)はペルシアで徴兵検査に用いたからだという。インドでは婚礼の夜を祝福する吉星となっている。

ところで奇怪な名は斗柄ηのベナトナッシで，この意味は「棺の娘たちの長」である。4辺形が大きな棺，3星は3人の娘で，北極星アルゲディ(殺し屋)に親を殺された仇を報いようと，棺を押しながら絶えずめぐっている。娘の一人がミザールで背負っている赤ん坊がアルコ

ルだという。沙漠のアラビア人の執念深さを思わずロマンスである。

北斗七星にはいろいろの和名があるが，奈良・平安の昔から盤双六に振ったサイの目のシソウ(四三)のホシが有名である。今でも広くいわれていて，私は初め伊予灘の老漁夫が丁半博打に使うサイコロの目だといったという話を聞いた。

シソノ星天の壺皿こぼれけん 抱影

2. コップ (CRATER)

子午線経過5月8日。ヒュドラの背にコップを載せたとは判じものだが，4つの星のY字形が見てとれる。コップとはまずい訳名だが古風で明治を思わせぬでもない。ギリシア美術で著名な両耳つきの台杯クラーテルだから原名をそのまま用いてよかったと思う。神話では酒神ディオニューソス(バッカス)の持器である。コップでは飲み屋の樽に目をすえる矢大臣だろうか。

3. からす (CORVUS)

5月23日子午線経過。小さい星座だが，4つの3等星の描く4辺形が5月の夜空にはっきり仰がれる。高さ37°も目に快い。

これもヒュドラの背にとまっているが，紙細工で4辺形をハスに折るとどうやらカラスになる。右下の4等星αアルゴラブ(カラス)が目だという。古くアラートの天文詩にもコラク(カラス)とあるが，鳴き声からの名らしい。ヒュドラの背をつついているようだである。

神話では，初め銀翼に輝き人語をも解したカラスで，アポロンが妻の隠し目付けに使っていたが，大嘘つきと判って醜い野ガラスに変えられたという。

この4辺形はスパンカー(後橋帆桁)とよばれ，航用恒星として上辺の東への延長が自然にスピーカを求めさせる。和名は広くヨツボシだが，能登地方ではホカケシという。好い名である。青みな月の夜の海をひっそりと行く帆かけ船，象牙のカジに銀のカイなら，歌を忘れたカナリヤが乗っているだろう。

私が初めて知ったこの和名は，奥多摩秋川谷の樵夫のいうカワハリボシで，荒壁に張りつけたムジナの皮とみたもの，雪女郎ものぞく夜か，貧寒骨に徹する星名である。

からす座が南中すると時を同じくして地平の彼方では南十字星が南中する。毎年6月，プラネタリウム解説のトピックになっている。

